

博士学位請求論文要旨

論文題名 中国当代の反ユートピア文学

提出者 朱力（中央大学大学院 文学研究科中国言語文化専攻 博士後期課程4年）

論文の要旨

1、本論文の主題

本論文は、中国当代の反ユートピア文学を主要な研究対象として、テキスト構造、暴力、人物形象、三つの角度からテキスト分析を行い、歴史と現実結び付けながら、社会的文脈から中国におけるユートピアに関連する文学創作を考察するものである。反ユートピア文学の分析に先立って、まず清末期の現代的ユートピア文学の形成から、1990年代の中国大陸における反ユートピア文学の出現までの過程を文学史的に考察した。また、反ユートピア文学から正反ユートピア文学への移行、という新たな現象に注目し、正反ユートピア作品の特徴とそれに対する「ユートピアの精神」という評論に含まれる危険性を指摘している。反ユートピア、正反ユートピア作品に対するテキスト分析を通して、中国の文学作品における表現手法の独自性と変化の軌跡、およびそれらの作品に見られる中国の歴史と現実に対する批判性を明らかにした。以上の考察を通して、中国の歴史と現実を再認識し、理解を深めることを目的としている。

2、本論文の構成

はじめに

第一章、ユートピアをめぐる諸概念について

第一節、「ユートピア」について

第二節、「ユートピア」と「反ユートピア」およびその発展

第三節、中国のコンテキストにおける「ユートピア」

小結

第二章、中国現当代におけるユートピアに関連する文学創作の系譜

第一節、民国期（1911年～1949年）：ユートピア文学からディストピア文学への移行

第二節、新中国建国初期（1949年～1950年代後半）：ユートピア文学の再現

第三節、1960年代前半および文化大革命期（1960年代前半～1976年）：ユートピア文学とリアリズムの融合

第四節、文化大革命終結から改革開放初期（1976年～1986年）：SF文学の再現と反ユートピア三部作の翻訳

第五節、1980年代以降：SF文学に見られる反ユートピア的要素

- 第六節、1990年代以降：反ユートピア文学の登場と発展
- 第七節、2010年代以降：反ユートピア文学の変貌
- 第八節、香港、台湾におけるディストピア、反ユートピア作品
- 小結

第三章、反ユートピア文学におけるテキスト構造

- 第一節、先行研究および四つのユニット
- 第二節、中国当代の反ユートピア作品における四つのユニット
- 第三節、ユニットの機能とテキストの特色
- 小結

第四章、反ユートピア文学における暴力

- 第一節、暴力と諧謔
- 第二節、暴力と象徴
- 第三節、暴力と忘却
- 第四節、暴力と観念
- 第五節、暴力の源流および特徴
- 小結

第五章、反ユートピア文学における人物形象

- 第一節、屋根裏に住む夢想家
- 第二節、抑圧される芸術家
- 第三節、時代に合わない周辺人
- 第四節、苦悩する現代人
- 第五節、反ユートピア文学における人物形象の特殊性
- 小結

第六章、反ユートピア文学の変貌

- 第一節、「江南三部作」におけるユートピアと反ユートピア
- 第二節、曖昧で不明確なユートピア
- 第三節、ユートピアの表象の錯綜
- 第四節、テーマにおける齟齬
- 第五節、「ユートピアの精神」という評論について
- 小結

おわりに

3、各章の概要

「はじめに」では、中国の歴史と現実を理解するために、「ユートピア」というキ

ワードが重要であることを強調した。本論文の構成、日中両国の先行研究を紹介した後、本論文の独自性について説明した。

第一章では、主に西洋の研究者の理論を引用しながら、ユートピア研究の歴史と現状を概観した後、ユートピアをめぐる諸概念の定義を確認し、本論文で使用する諸概念の定義を明らかにした。続いて、「ユートピア」の中国語への翻訳、および中国の現代的ユートピア文学の形成に影響を与えたテキストを紹介し、中国における現代的ユートピア文学の形成とその作品の特徴を検討した。清末期のユートピア文学は、西洋の初期作品と比べて、より強烈な政治性、迂遠な空想性を帯びている。現実に対する批判もより激しく、テキストの表現に混乱がある。以上の現象は、当時の中国社会の深刻な危機、思想面の混乱、および作者の内的な葛藤を反映している。しかし、より根本的な原因は、おそらく「超越のロジック」と「大同世界」の間の論理的な矛盾にあることを指摘した。

第二章では、清末以降の中国におけるユートピア文学からディストピア、反ユートピア文学、そして正反ユートピア文学までの変遷を整理した。1990年代以前の作品については、先行研究を踏まえつつ、これまで注目度の低かった作品、および文化大革命時代の作品を若干補充し、ユートピア研究の視座からの再整理を行った。1990年代以降の作品、本論文の主要な研究対象でもある反ユートピア、正反ユートピア文学については、重要な作品を概観し、作者の経歴や作風についても言及した。最後に、ユートピアに関連する文学創作の内面における変化に注目し、その社会的背景を分析した。

第三章では、主にフォルマリズムや構造主義の理論を参考にして、反ユートピア文学のテキスト構造、すなわち「ユートピアの提示」、「ユートピアの実行」、「ユートピアの変質」、「ユートピアの閉鎖」という四つのユニットの存在を提示した。この構造モデルを用いて、中国当代の反ユートピア文学の五作品、すなわち『白銀時代』、『受活』、『盛世：中国、二〇一三年』、『火星照耀美国』、『人面桃花』をそれぞれ考察し、反ユートピア文学のテキストに同じ構造が共有されていることを検証できた。また、テキスト構造の各ユニットの機能に分析を加え、各作品に散見されるやや特殊なユニット構成や、「輪廻」式の表現などについて分析した。

第四章では、『白銀時代』、『受活』、『盛世：中国、二〇一三年』、『火星照耀美国』の四作品を取り上げ、「暴力」という視座から考察を行った。この四作品の内容は、期せずして一つの完全な時空の連鎖を構成している。すなわち、文化大革命から、改革開放の時代を経て、国家の台頭、そして台頭後、という時空の移り変わりである。それぞれの時空の中で、暴力がどのように表現されているか、そして暴力に対する表現がどのように変化しているかを考察した。各作品に描かれている暴力の場面を整理し、暴力についての表現手法およびその特徴を分析している。その上で、四作品が描いた暴力の場面を鳥瞰し、総合的分析を行い、中国当代の反ユートピア文学の特徴と発展傾向を明らかにした。具体的には、暴力と中国の現実、特に文化大革命との関連などである。そして、科学や経済の進歩、社会の安定に伴い、権力・ユートピアによる暴力がより効率的、合理的、不可視的になる傾向にあることを指摘した。

第五章では、『人面桃花』、『白銀時代』、『盛世：中国、二〇一三年』、『我的祖国不做夢』の四作品を取り上げ、主に「狂人」を手がかりにして、テキストと歴史・現実を結びつけ、登場人物が「狂気」に至る理由とその人物形象の由来を分析した。反ユートピア文学が描く「狂人」は、多くの場合、周りに理解されない「異常」な存在で、「狂気」の原因はより複雑で内面化された心理的葛藤、あるいは近代的な生活

様式による抑圧である。狂人という主要な分析対象のほか、ユートピアの実行者や女性人物などにも触れた。また、人物形象と作家自身の間には、類似点が多いことも指摘した。

第六章では、「江南三部作」のテキストを分析し、「反ユートピア的なユートピア」という先行研究の結論を再検証しながら、正反ユートピア文学のあり方を考察した。「反ユートピア的なユートピア」という評価は、作品におけるユートピアの表象の複雑さおよび複数のテーマの衝突を指摘した点において、ある程度の合理性がある。しかし、『人面桃花』と『山河入夢』は依然として反ユートピア作品である。そして、「江南三部作」全体については、「ユートピアの精神に対する重視や喚起」が、作品に含まれる批判性を弱めていることを指摘する一方、正反ユートピア作品として積極的に評価した。

「おわりに」では、本論文の内容を振り返った後、中国の反ユートピア文学創作が歴史、現実と緊密に関連していることを指摘した。そして、歴史的、社会的文脈から、中国当代の反ユートピア文学の形成と発展、正反ユートピア文学への変貌を再整理した。また、反ユートピア文学の功績と問題点をまとめ、ユートピアに関連する文学がその時代の社会状況を反映していることを再確認した。最後に、本論文に残された問題と反省点について述べた。

4、論文の独自性

本論文は、研究手法として文学史の整理と個々の作品分析を結合させている。まず清末から現在（2020）までの中国におけるユートピアに関連する文学創作の変遷を鳥瞰した。従来は別々に研究される傾向にあった近代、現代、当代をまとめて扱うと同時に、反ユートピア文学から正反ユートピア文学への移行、という新たな現象にも注目した。また、作品分析において、内容によって分類するのではなく、反ユートピア文学の概念によって作品を選び、総合的な分析を行っている。これによって、異なる作家の相違の大きい作品の間に、同じ反ユートピア作品としての共通点があることを明らかにできた。さらに、この共通点を踏まえて、各作品の特徴および変化の軌跡を考察することで、中国の歴史と現実に対する理解も深まった。

日本ではユートピアや反ユートピアの視座による中国当代文学の先行研究がほとんどない。一方、中国では政治的タブーや自己規制などの理由で、反ユートピア文学研究が困難になっている。この点において、本論文は、当該分野の空白を埋め、新たな視点を提供できたと考える。

5、今後の課題

反ユートピア文学における「価値判断」と「美学志向」の間にある矛盾を調和させることは極めて難しい。しかし、政治性が極めて高い反ユートピア文学にも、芸術性が欠けているはずはない。本論文は分析の際に、美学的な視点からのアプローチが少なく、歴史と現実を結び付け、結論を政治批判に回収することが多かった。その最も大きな理由は、中国当代の反ユートピア文学が批判しようとする問題が極めて身近で、作品に対する政治的分析と美学的分析の間にジレンマが生じる恐れがあったからだ。今後は、反ユートピア文学における政治的要素と美学的要素の調和の可能性を念頭に置いて、研究を続けて行きたい。

さらに大きな課題は、中国の近代化のプロセスを踏まえたテキスト分析である。ユートピアという概念の内的論理は近代性の論理と一致しており、近代化の始まりによってユートピア文学が誕生したと考えられる。したがって、ユートピアや反ユートピアに関連するテキストを分析し、中国の近代化のプロセスを考察することは可能であろう。とはいえ、それはすでに文学研究の範疇を超えている。本論文は、反ユートピア文学を切口として中国の歴史と現実を再認識し、理解を深めることを目指した。しかし、近代化のプロセスという視点からの分析が少なく、能力の限界を感じる。この点も今後の研究の長期課題としたい。